関島寿子ー定式を超える思考

関島寿子の植物造形は、素材と編組構造、形態についての考察によって生み出される。編組とは植物や布、糸、金属など、繊維状にした素材を編んだり組んだりして成形する方法のことで、関島はそれを6種類の構築法「絡める」、「結ぶ」、「組む」、「巻く」、「織る」、「もじる」に分類して整理している。重要なのは構造の原理であるため、例えば「網代編」と「麻の葉編」は編み目の文様としては異なっても、構造としては同じ「組む」に分類される。用いる素材はクワ、ヒノキ、ヤナギ、コウゾなど、庭で栽培可能な一般的な植物の皮や茎、葉であるが、形状や硬度、反発力といった素材が持つ個々の性質によって分類され、その性質にあわせて各構築法が選択される。そして、素材の性質と構築法の組み合わせによって形態が決まる、という三者の関係性を関島は定式として自身の視点で整理して思考の土台としている。ただ、この定式に則るだけであれば三者の連関は必然的に決定するだけであるため、関島は定式の枠を超えた場所に作品を生み出す。その超え方が作品の見所となる。

定式を超える方法を作家は「自分を割り込ませる」と表現するが、定式に割り込ませる自分とは、作品を構成する素材や構築法、構造、形態についての疑問や仮説、試行錯誤から生じる発見を起点にした自身の思考の展開である。作品タイトルに示されるそれが、イレギュラーや定式外からの視点となって、作品を定式の外へと導き出すのである。定式を土台にした作家の思考展開が制作の核なのであり、その端的な可視化が関島の作品といえる。

関島が分析的な思考態度で制作に取り組むようになる契機は、1970年代後半、アメリカの工芸との出合いにある。古くからある既成の技術を見直し、表現手法にしていく制作姿勢を、工芸センターの講座やアメリカ現代工芸館の企画展、またはエド・ロスバックやジョン・マックイーンといったアメリカのバスケタリーを代表する作家たちの作品から目の当たりにし、刺激を受け、籠をテキスタイルアートとして制作するという視点を得たのであった。しかし、だからといって、関島の制作はアメリカ工芸の系譜に留まるものではないであろう。それは、自身のアイデンティティがアメリカに根差しはしないことに自覚的であったからでもあるが、日本の民具を入り口に、洋の東西を問わず古来の編組による様々な道具を観察し、他者の研究から学び、編組の原理を追究することによって、自力で獲得したより普遍的な視点でその制作が為されているからである。

理屈が勝った制作と受け取られるであろうか。しかしそうではない。なぜなら発見とは感動を伴う行為だからである。大小様々な感動の集積が関島の作品である。考えることの愉しさに満ちていて、作品を通して誰しもがそれを体験できる。素材も技法も制作環境も、特殊なものはなにも必要とせずに、自然と人間ががっぷり四つに組み合った誠実で切実な取り組みがそこにある。物事を分析的に考え、自分の観念に置き換える。そのようにして一つずつ世界を理解しながら過ごす日々が、関島寿子の作品を作り出している。創造とは深い思考とそれに基づく的確な実践の賜物であることを関島の制作はあらためて教えてくれる。

島崎慶子（菊池寛実記念 智美術館　学芸課長）